

各所属長並びに関係の皆様

吃音講習会実行委員会
顧問 牧野 泰美
(国立特別支援教育総合研究所)

どもる子どもとの対話 ～子どものレジリエンスを育てる～

第8回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会のご案内

1 趣旨

私たちは「どうしたら吃音と共に豊かに生きることができるか」を、どもる子どもたちや家族と一緒に考えてきました。吃音は世界中で100年以上研究されてきましたが、原因も根本的な治療法も解明されていません。私たちは吃音を治すことはできませんが、対話することはできます。その中で、多くのどもる子どもや大人と関わり、吃音をマイナスのものとしめない生き方があること、そして子どもたちは深く考え、語ることができることを知りました。

そこに至る過程の中で見えてきたのが「対話のもつ力」であり、この私たちの気づきを支えるのが先入観なく子どもの話を聞く「無知の姿勢」や「その人が問題ではなく、問題が問題である」と問題の本質を見極める、ナラティブ・アプローチとの出会いでした。さらに、今回示された「特別支援学校学習指導要領解説・自立活動編」には、指導例として「吃音について学び、吃音をより客観的に捉えられるようにする」が、具体的な内容として「吃音理解に関する本と一緒に読む中で、吃音に対する『分からない故の不安』の軽減を図る」ことが挙げられています。これは私たちがこれまで行ってきた「どもる子どもとの対話の実践」に通じるものです。この講習会では、こうした取組の中で、私たちが大切にしていることを、どもる子どもの保護者や成人のどもる人も含む参加者のみなさんと共に見つめ直し、整理していこうと考えています。また、どもりながら、ろう学校の教員として仕事を続けてきた佐々木和子さんに、どのように日常生活をサバイバルしてきたか、インタビューや参加者のグループでの話し合いを通して、彼女のレジリエンス(回復力・逆境を生き抜く力)を探ります。

全国のどもる子どもの保護者、ことばの教室の担当者、関係する教師、言語聴覚士と一緒に、日ごろの実践を捉え直し、新たな展望を開くために、熱く、楽しく、有意義な時間を作りましょう。

実行委員長 辻 大輔 (三重県津市立修成小学校)

2 主催 吃音を生きる子どもに同行する教師・言語聴覚士の会
NPO法人大阪スタタリングプロジェクト

3 後援 NPO法人全国ことばを育む会

4 日時 2019年8月3日(土) 9:45～19:15
4日(日) 9:00～16:45

5 会場 三重県教育文化会館 5F・大会議室
住所：三重県津市桜橋2-142
TEL：059-228-2077

6 アクセス JR紀勢本線・近鉄名古屋線「津駅」から
徒歩5分(約500m)

※津駅までは近鉄特急で名古屋駅から約50分。
大阪・難波駅から約90分。
中部国際空港セントレアから「津なぎさまち」
まで高速船で45分。「津なぎさまち」から津駅
までバスで12分。



7 内容・プログラム

8月3日(土)

- 9:30～ 9:45 受付
- 9:45～10:00 はじめの会(開会のあいさつ、自己紹介)
- 10:00～12:30 対話をめぐる対話(基調提案に代えて)
伊藤伸二・日本吃音臨床研究会
ことばの教室担当者(高木浩明 渡邊美穂 溝上茂樹 黒田明志)
- 12:30～13:30 昼食
- 13:30～14:20 全国難聴・言語障害教育研究協議会全国大会の発表の報告
吃音分科会 横浜市立東小学校 土井幸美
難聴分科会 千葉市立院内小学校 金井あかね
- 14:30～16:30 吃音を生きる成人へのインタビュー
元ろう学校教師 佐々木和子さん
[インタビュー後グループで話し合い・全体でシェア]
- 16:45～17:45 ミニ講座① 吃音を生き抜く吃音哲学の前提
伊藤伸二・日本吃音臨床研究会
[健康生成論、レジリエンス、オープンダイアログ、哲学的対話
ナラティブ・アプローチ、ネガティブ・ケイパビリティ]
- 18:00～19:15 グループでの話し合い
[この日の学びを中心に、日頃感じていることなど]
- 19:30～ 懇親会 ※希望者

8月4日(日)

- 8:50～ 9:00 受付
- 9:00～10:00 ミニ講座② 「対話」のもつ可能性
牧野泰美・国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員
- 10:10～11:40 どもる成人のセルフヘルプグループによる講座
大阪スタタリングプロジェクト
- 11:40～12:40 ミニ講座③ 吃音を生き抜く吃音哲学のすすめ
伊藤伸二・日本吃音臨床研究会
- 12:40～13:40 昼食
- 13:40～15:00 どもる子どもとの対話の実践報告・演習
ことばの教室担当者
- 15:15～16:45 みんなで語ろう、ティーチイン

懇親会のお知らせ

講習会1日目の終了後に、懇親会を企画しています。これまでの講習会でも、「この時間に本当にいろいろな話ができ」「日頃どもる子どもたちと関わる中で感じていることが、お互いに共感できた」「ちょっと悩んでいることへの解決の糸口が見つかった」などの感想が多数寄せられています。とても貴重で、素敵な出会いの場です。ぜひ、皆様のご参加をお待ちしております。

なお、会費は講習会参加費とは別に、当日、3,500円を収集させていただきます。

8 講習会参加費 6,000円

9 参加申し込み方法

下記の①もしくは②のいずれかの方法で、申し込みください。

①必要事項を記入し、**ハガキか封書**で郵送する。

②吃音講習会のホームページから、参加申込書をダウンロードして、必要事項を記入し、**メールまたは封書**で送る。

☆参加申し込みと同時に、郵便局より参加費を振り込んで下さい。郵便振替による入金後、当方で入金確認ができるまで4～5日を要します。

☆参加申し込み書と参加費の入金確認ができた時点で、正式参加申し込みとします。両方の確認ができましたら、受講票をお送りします。当日、受付で受講票をご提示下さい。

◇参加申し込み後、1週間程度経っても返信がない場合は、申し訳ありませんが、下記の問い合わせ先まで、電話でご連絡を御願い致します。

(メールがうまく届かないケースが、これまで希にありました)

◇参加費は当日キャンセルされてもお返しすることができません。受講票は他の方にお譲り下さい。

○必要事項…①名前(ふりがな) ②所属名 ③自宅住所(郵便番号) ④電話番号(あればFAXも)
⑤メールアドレス ⑥懇親会参加の有無

○郵便振替 加入者名：吃音講習会 口座番号：00960-0-282459

10 申し込み先 千葉県千葉市立花見川第三小学校 黒田明志
〒262-0046 千葉県千葉市花見川区花見川1-1
Mail:kituon-kosyukai@live.jp

11 問い合わせ先 日本吃音臨床研究会
〒572-0850 大阪府寝屋川市打上高塚町1-2-1526
TEL/FAX 072-820-8244

12 宿泊その他

宿泊に関しては、現地宿泊施設に直接お申し込み下さい。津駅周辺にはたくさんのホテルがありますが、伊勢神宮や鈴鹿サーキットなどの観光地も近く、早めに宿泊予約されることをおすすめします。また、講習会中の食事に関しては、教育文化会館別館および津駅周辺に食事ができるお店が複数あります。お弁当、コンビニ等でお買い求めいただいたものを、会場内で飲食することも可能です。

吃音講習会のホームページを知っていますか？

これまでの講習会の報告、大会要項に載せた資料などご覧になれます。講師の先生方からの貴重な提案や、ことばの教室の実践報告、どもる子どもや大人の声など、参考になる資料が満載です。ぜひご覧ください。

「どもる子どものレジリエンスを育てる」

アドレス：<http://www.kituonkosyukai.com/>



13 講師紹介

◇牧野 泰美 国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員

専門は言語障害教育、言語獲得、コミュニケーション障害とその支援など。「全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会（全難言協）」をはじめ、各地の「きこえとことばの教室」の担当者や、親の会等と連携しながら、子どものことばやコミュニケーションへの支援の在り方、きこえとことばの教室の役割などについて研究活動を進める。

著書に、『言語障害のおともだち』（ミネルヴァ書房）、『基礎からわかる言語障害児教育』（学苑社）など。

◇伊藤 伸二 日本吃音臨床研究会会長

21歳の時、セルフヘルプグループ言友会を創立。大阪教育大学専任講師（言語障害児教育）などを経て、現在伊藤伸二ことばの相談室主宰。第1回吃音問題研究国際大会を大会会長として開催し国際吃音連盟の礎を作る。論理療法、アサーティブ・トレーニング、竹内敏晴レッスン、認知行動療法などを活用し、吃音と上手につきあうことを探る。

著書に、『両親指導の手引き書41 吃音とともに豊かに生きる』（NPO法人全国ことばを育む会）、『吃音の当事者研究—どもる人たちが「べてるの家」と出会った』（金子書房）など。

「吃音を生き抜く子どもたちにとって、今なぜ対話が必要なのか」

伊藤伸二・日本吃音臨床研究会

「あなたはあなたのままでいい」「あなたはひとりではない」「あなたには力がある」

私たちは、どもる子どもたちと、対話や日常生活の体験を通して、このメッセージを互いに確認し合ってきました。社会では、多様性が言われ、多様な働き方、生き方が肯定的に捉えられるようになりましたが、「私は私のままでいい」と思えない、自己肯定感の低い子どもや青年が少なくないのが、現実の社会です。

一方で、トラウマになり得るような過酷な経験をして、劣悪な環境に育っても、健康を保ち続ける人々が3割程度いることが、いくつかの調査研究から明らかになっています。病気や障害の原因を追及し、治療・改善して健康な生活を目指す「疾病生成論」に対して、この3割の人たちにどのような条件があったのかを追求する「健康生成論」や「レジリエンス」の考え方が生まれてきました。技法としては、当事者研究、ナラティブ・アプローチ、オープンダイアログ、ポジティブ心理学などが注目され、その実践が数多く紹介されるようになりました。

これまで、アメリカ言語病理学をベースにした吃音の治療では、言語訓練を中心にした、「吃音を治す・改善する」ことに視点が置かれてきました。100年以上も続いた吃音研究・臨床の歴史をみても、「吃音を治す・改善する」は、一部の人には成果が見られたとしても、多くの人にとっては、成功していません。アメリカのスピーチセラピストの9割以上が、吃音の臨床に苦手意識をもつのはそのためです。そして、現実には多くの人の吃音は治っていません。

社会でいかに多様性が言われ、自己肯定感を育てる、といわれても、吃音をネガティブなものとして捉える限り、どもりながら豊かに生きることは難しいでしょう。吃音が未だに原因が解明できず、「ゆっくり、そっと、やわらかく」発音する流暢性形成技法しかもたない、これまでのアメリカ言語病理学をベースにした取り組みは限界に来ています。

発達障害者支援法や、障害者差別解消法などがあっても、社会の意識はそう簡単に変わるものではありません。吃音に対する社会の理解も、「吃音と共に生きる」ことに必ずしも結びついていません。障害があるなしにかかわらず、誰にとっても現代は生きにくい社会といえるでしょう。吃音と共に生きることは簡単ではありません。安易に「どもってもいい」とは言えないでしょう。吃音治療の歴史と現実、どもる人たちが生きてきた人生を踏まえた上での「吃音を生き抜くための吃音哲学」が必要です。

私たちは、どもる子どもとの対話を通して、吃音哲学を作り上げていこうとしています。その手がかりとして、昨年末に、『どもる子どもとの対話～ナラティブ・アプローチがひきだす物語る力』（金子書房）を出版しました。より具体的な学習場面、子どもとのやりとりや対話の場面を再現しました。また、吃音を生き抜く子どもたちにとって、対話がなぜ必要か。どのようなテーマで対話をするか。対話につながる素材は何か、ことばの教室の実践と共に提案しました。どもる子どもたちが、自分のことや自分の吃音のことを、自分のことばで語ることや対話することに、大切な意味があると考え、私たちの仲間はそのことに取り組んでいます。